

清・張自超の『春秋宗朱辨義』について（下その1）

On Zhang Zichao's Chunqiu zong Zhu bianyi (Distinguishing the Meaning of Spring and Autumn Annals following Zhu Xi)

滝野 邦雄
Takino, Kunio

十一 『春秋』における褒貶は、書かれている内容によって示される。「公子」がついているか、「氏」をつけてあるかどうかなどで、褒貶を示してはいない。つまり、褒貶は事実関係で示され、「氏」・「族」・「名」・「字」が書き込まれているかどうかで示されるものではないのである。

諸儒 「公子」と書す・「公子」と書せず、氏を書す・氏を書せざるを以て褒貶と爲す。然れども『春秋』を攷うるに、内は惟だ公子翬 前に「公子」と稱せず、後に「公子」と稱す①、外は惟だ陽處父 前に氏を稱せず、後に氏を稱す②。其の他は則ち「公子」と爲す者は始終「公子」と稱し、氏有る者は始終 氏を稱す、未だ嘗て事の美惡に因って忽ち削り忽ち書し以て義を示さず。蓋し「公子 翬」を以て後有り、國に於いて世々卿と爲り以て國政を専らにす。此れ積漸にして大夫と爲り之を天下に用事す。聖人其の實に因り以て之を著す。豈に書す・書せざるを以て褒貶と爲さんや。故に春秋の初め、内は「公子」と稱せず・氏を稱せざるの大夫有りて之を奪う者を以て之を貶しむるに非ざるなり。春秋の後、外は「公子」と稱せざる・氏を稱せざるの大夫の以て之に予かるに非ざる者の之を褒むるは無きなり。褒貶は事に在りて氏・族・名・字に在らず。諸儒の説の如ければ、是非・公罪（公務上の過失により得た罪）の亂るる者多し。詳しくは各條の下に見ゆ（『春秋宗朱辨義』巻首・總論・七葉～八葉）。

①『春秋宗朱辨義』巻二・「[桓公三年] 公子翬如齊逆女」条に「隱 [公]

の時、「翬帥師（翬 師を帥いる）」は兩つながら見ゆる（隱公四年・隱公十年）に、「公子」と稱せず。桓〔公〕の時の「逆女（女を逆う）」に一たび見えて「公子」と稱す。伊川（程頤）以て「公子」と稱せざるは、隱〔公〕の賊なればなり。「公子」と稱するは、桓〔公〕の黨なればなり」（『河南程氏經說』卷四・春秋傳・「桓公三年」公子翬如齊逆女）と爲す。諸儒の議論 多く此れと合す。〔その議論は〕是れ夫子「公子」を未だ君を弑さざるの前に削り、「公子」を既に君を弑するの後に書すは、後人の翬の賊爲るを知らざるを恐れ、故さらに反って其の名いい、實に文を爲して以て後人の疑を發し、思いて之を得しむるなり。〔これは〕亦た太はだ曲れり。何ぞ「公子」を未だ君を弑せざるの前に書せず、「公子」を既に君を弑するの後に削り、更に明白直捷（捷）（明白でわかりきった）と爲さんや。蓋し翬は隱〔公〕の時に在りて、軍政を主とすると雖も、隱〔公〕 尚お能く之を制し、君眷 未だ深からず、己の威 未だ立たず、未だ嘗て之に命じて公子と爲さざるなり。桓〔公〕の時に至り、桓〔公〕 其の己を戴だくの恩を感じ、翬 君を立つるの續有るを待み、眷 主に深く、威 人に加え、桓〔公〕 公子を以て之に命じ、史臣も亦た公子を以て之を書す。是に於いて夫子 之に因る。而して義 自ずから立つなり…（『春秋宗朱辨義』卷二・桓公・九葉～十葉・「桓公三年」公子翬如齊逆女）条）。

②陽處父：『春秋宗朱辨義』卷六・「文公二年」三月乙巳及晉處父盟」条に「……處父の初めて經の「及盟」に見えるに氏いわず、而して「文公三年に」江を救うに「陽處父と」氏いう。安くんぞ翬の前に「公子」と稱せず、後に「公子」と稱するは、之に「公子」を命じ、而して後に公子たるが如くならず、之に「氏」を賜い而して後に氏するを知らんや。諸儒 謂う、氏を削り以て其の抗（対等にする）を治むと（a）。夫れ『春秋』 内の大夫の諸侯と盟すると公の外大夫と盟すると多し。

獨り處父の氏を削るは、其の義 以て通ず可からず（『春秋宗朱辨義』卷六・文公・七葉・「[文公二年] 三月乙巳及晉處父盟」条）。

(a) 『左傳』・『公羊傳』・『穀梁傳』などでは、經に「及晉處父盟」とのみあり、魯・文公の「公」の文字が記されていないのは、晉の大夫と魯・文公が盟ったのを諱んだためであり、處父の氏を削ったのは、魯・文公と対等であるかのようにしたためであるという。

十二 天王の「崩」・「葬」の書き方は、通告があり、葬礼に行った時には、「崩」・「葬」とともに記し、通告があっても、行かなかった時は、「崩」と記すだけである。通告もなく、行かなかった場合は、「崩」・「葬」とともに記さない。これを押し広めて、『春秋』に記される「崩」・「薨」・「卒」・「葬」を考えると、単に事実関係にしたがって記されているだけであり、朱子がいうように、『春秋』の「崩」・「薨」・「卒」・「葬」は原より意義無しであることが理解できる。

文定（胡安國） 天王の「崩」・「葬（葬）」を論じて以爲らく「崩^{しる}を志し葬（葬）を志す者は、赴告（隣国への通告）の及びて、魯 往きて會するなり。「崩」を志し「薨（葬）」を志さざる者は、赴告の及ぶと雖も、魯 會せざるなり。「崩」・「葬（葬）」の皆な志さざる者は、王室 告げず、魯 亦た往かざるなり」（『春秋胡傳』卷一・「隱公三年」三月，庚戌，天王崩」条），と。其の説 最も合す。此れに準じ以て諸侯の「卒」・「葬（葬）」を論ぜしむれば、則ち以て通ず可からざるは無し。而して諸侯の葬（葬）例に於いては以て「禮に怠り有りて葬（葬）いわず、其の君を弱くして葬（葬）いわず、其の事 無ければ、其の文を闕くとは、魯史の舊なり」（『春秋胡傳』卷一・「隱公三年」癸未，葬宋穆公」条）と爲す者は、猶お其の義を得。「其の賊を討ちて葬（葬）いわず①、其の辱を諱みて葬（葬）いわず②、其の罪を治めて葬（葬）いわず③、其の號を避けて葬（葬）いわず④は、以て聖人の削る所と爲すは、『春秋』の法なり」（『春秋胡傳』卷一・「隱公三年」癸未，葬宋穆公」条）と云う所の者に至りては則ち盡くは然らざるなり⁽¹⁾。朱子

曰く、『春秋』の「崩」・「薨」・「卒」・「塋（葬）」は原より意義無し」（『朱子語類』卷八十三・春秋），と。蓋し其の「塋（葬）」と書すと「塋（葬）」と書せざるとは，上にして天王，大にして齊・宋，親にして晉・衛，小にして滕・薛・邾・杞，外にして秦・楚，變にして弑君あるも往きて會すれば，則ち書し，往き會せざれば則ち書せず，其の當に往くべくして往かざると，當に往くべからずして往くとは則ち其の實に因りて之を著す。而して別に意義有るに非ざるなり。詳しくは各條の下に見ゆ（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・八葉）。

①其の賊を討ちて塋いわず：『春秋胡傳』卷一・「『隱公三年』癸未，葬宋穆公」条に「宋の殤（魯・桓公二年）・齊の昭（魯・文公十四年），亂を告げて「弑」と書す。而して經は「葬」と書せず，是れ其の賊を討ちて塋いわざる者なり」。

②其の辱を諱みて塋いわず：『春秋胡傳』卷一・「『隱公三年』癸未，葬宋穆公」条に「晉・夏の盟を主とし，景公の時に在りて，喪を告げて日を書す（魯・成公十年・經「丙午，晉侯獯（景公）卒」）。而して經は「塋」を書せず，是れ其の辱（魯の成公が無理やり晉の景公の葬儀に參列させられたこと）を諱みて塋いわざる者なり」。

③其の罪を治めて塋いわず：『春秋胡傳』卷一・「『隱公三年』癸未，葬宋穆公」条に「魯・宋の盟・會 未だ嘗て同じからず。而して〔魯

（1）『春秋宗朱辨義』に，

……文定（胡安國）の塋（葬）いわざるの例の云う所の「其の辱を諱む・其の賊を討つ・其の罪を治む・其の號を避け，而して塋（葬）いわず」なる者に至りては，亦た非なり。『春秋』の書法を觀るに，「某國塋（葬）某公」と曰わず，而して「塋（葬）某國某公」と曰う。原より以て我の往きて其の塋（葬）に會するを著す。故に往きて會すれば則ち書し，往きて會せざれば則ち書せず。但だ其の間に當に往きて會すべきに往きて會せず有り・常に往きて會すべからざるに往きて會する有り，則ち事に因りて以て義を見ず。蓋し當に往きて會すべきに往きて會せざる者は，私怨を以て禮を廢するなり。當に往きて會すべからざるに往きて會する者は，私好を以て義を害するなり（『春秋宗朱辨義』卷一・隱公・十九葉・「『隱公三年』癸未，葬宋穆公」条）。

とある。

の閔公・僖公・文公の] 三世「にわたって宋の桓公・襄公・成公・昭公の」
葬いわず、是れ其の罪を治めて葬いわざる者なり」。

④其の號を避けて塋いわず：『春秋胡傳』卷一・「[隱公三年] 癸未、葬宋穆公」条に「呉・楚の君の「卒」と書する者は、十あり。亦た「襄公二十九年に「親から西門の外に送る者有り（a）、而して經は「葬」と書せず、是れ其の號を避けて葬いわざる者なり」。

(a)『左氏傳』襄公二十九年・傳に「夏四月、楚の康王を葬る。公陳侯・鄭伯・許男と葬を送りて、西門の外に至る。諸侯の大夫は皆な墓に至る」。

十三 「葬」の記述について、魯の場合は、他国に赴告し禮をもって葬むった場合は「葬」と記し、赴告せず禮をもって葬むらない場合は「葬」と記さない。他の諸侯の場合は、魯が行けば「葬」と記し、行かなければ「葬」と記さないというものである。「葬」の記述についても、孔子が価値判断をもって筆削を加えたものではない。やはり、朱子がいうように、「『春秋』の「崩」・「薨」・「卒」・「葬」は原より意義無し」なのである。

『公羊傳』・『穀梁傳』 以て「君を弑されて賊を討てば則ち葬（葬）と書し、賊を討たざれば則ち葬（葬）と書せず」①と爲す。而して内は桓公「を弑した」の仇 未だ復（復讐）せざるに葬（葬）いう②の以て通ず可からずに於いては則ち以爲らく「其の國を踰えて討つを責めず」（『穀梁傳』・桓公十八年）、と。閔公の賊 既に討たれ而して塋（葬）いわずの以て通ず可からずに於いては則ち以爲らく「母を討つを以て子を葬（葬）るとせざればなり」（『穀梁傳』・閔公二年）、と。外は宋の捷（捷）（閔公）・齊の光（莊公）・齊の卓（晉の卓子）③・衛の剽（殤公）の賊の既に討たれ而して塋（葬）いわずに於いて・蔡の景「侯」・許の悼「公」の賊の未だ討たずして塋（葬）いうに於いての以て通ず可からざれば則ち多く之が辭説を爲すは非なり。内にして諸侯に赴（赴告）し禮を以て葬（葬）れば則ち書し、諸侯に赴（赴告）せ

ず禮を以て塋（葬）らざれば則ち書せず。外にして魯 往き會すれば則ち書し、魯 往き會せざれば則ち書せず。舊史に因り筆削有るに非ず^④。正に朱子の所謂ゆる「崩・薨・卒・塋（葬）は、甚だしき意義無き」（『朱子語類』卷八十三・春秋）者なり。詳しくは「壬戌公薨」條の下に見ゆ。（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・八葉～九葉）。

①『公羊傳』・『穀梁傳』の「〔隱公十一年〕冬十有一月壬辰公薨」条ともに「君 弑され、〔その〕賊 討たれざれば、「葬」と書せず」。

②『春秋』經に「〔桓公十八年〕冬十有二月己丑、葬我君桓公」。

③『春秋宗朱辨義』卷一・隱公・三十六葉・「〔隱公十一年〕冬十有一月壬辰公薨」条には「晉卓」とある。

④『春秋宗朱辨義』卷一・隱公・三十六葉・「〔隱公十一年〕冬十有一月壬辰公薨」条に、「……古の塋（葬）事 亦た綦重（極めて重要）なり。『周禮』に諸侯の喪には天子 總衰す（春官宗伯）、家人に「爵等を以て封丘（丘封）の度と其の樹數とを爲す」（春官宗伯家人）、又た之が「墓位を正し、墓域に蹕いし、墓禁を守る」（春官宗伯家人）を爲す。春秋の時、禮 或いは行なわれず、而るに尚お會塋（葬）の使有り。傳に稱すらく「〔諸侯〕五月にして塋（葬）り、同盟 畢く至る」（『左傳』隱公元年秋七月は「天子七月而葬、同軌畢至。諸侯五月、同盟至」）、と。則ち草草に事を卒え遂に以て塋（葬）を爲すに非ざるを知るなり。當に是れ内にして禮を以て塋（葬）れば則ち書し、禮を以て塋（葬）らざれば則ち書せず、外にして來り告げ往き會すれば則ち書し、來り告げず往き會せざれば則ち書せざるべし。舊史は事の實に據り、夫子史の文に因りて賊を討つ・賊を討たずもて「塋（葬）」と書す・「塋（葬）」と書せず。夫子の筆削に出ずと謂う者は非なり……」。

十四 『春秋』について議論する人たちは、君を弑した賊は、討ち取られなければ、以後『春秋』に記されないことから、その賊を『春秋』から削ることで、

聖人の筆誅を示しているという。しかし、その例外として晉の趙盾は、なんとか説明できているが、それ以外の商人（齊・懿公）や商臣（楚・穆王）については、検討すら加えていない。

『春秋』を説く者は、君を弑するの賊 未だ討たれざれば則ち再び經に見さざるを以て、聖人 其の人を削り以て之を誅すと爲すなり。而して趙盾 經に見るの以て通ず可からざるに於いては、則ち以て〔趙〕盾 親から君を弑する者に非ず、「法の爲めに惡を受く」①、故に聖人 之に貸（転嫁）すと爲す。此の説を爲す者 亦た未だ齊の商人②・楚の商臣③に於いては皆な君を弑するの賊にして『春秋』の書する所の齊侯・楚子は即ち其の人（商人（齊・懿公）と商臣（楚・穆王））なる〔に検討することを〕を致さざるのみ。詳しくは「趙盾孫免侵陳」條の下に見ゆ（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・九葉）。

①『左傳』宣公二年・傳に「孔子曰く、蚩狐は古の良史なり。法を書して隠さず。趙宣子（趙盾）は古の良大夫なり、法の爲めに惡を受く。

（2）『春秋宗朱辨義』卷七・宣公・十二葉・「〔宣公〕六年春晉趙盾衛孫免侵陳」条に、……『公羊傳』 君を弑するの賊 經に見さず、而るに趙盾 經に見るを以て、〔そこで〕遂に〔趙〕盾は親から君を弑するに非ず、賊を討たざるを以て加えるに君を弑するの罪を以てすと謂う①。陳氏（宋・陳傅良／『春秋後傳』卷七・「〔宣公〕六年春晉趙盾衛孫免侵陳」条）を以てらく「趙盾の再び『春秋』に見るは、貶無し。宋萬より以下、賊を討つ無き者は則ち凡（九）人のみ」②、と。皆な非なり。君を弑するの賊の經に見れざるは、此の例無きなり。前は則ち其の賊「既に討たる。後の討たざる者は、書するを得るに事無し。則ち亦た書せざるは、『春秋』の意有りて之を削り以て誅絶を示すの義に非ざるなり。魯に下いて則ち公子翬 經に見る。然らば猶お罪 首從（正犯と從犯）を分かつと曰うべし。魯の隠〔公〕を弑するは當に獄を桓〔公〕に歸すべし。翬の罪 或いは貸（転嫁）す可きなり。桓〔公〕の十八年の間の如きに至りては、書す所の「公」は即ち桓〔公〕なり。何を以て經に見るや。宣公の仲遂（魯・文公の没後、宣公を即位させるために太子惡とその弟の視を弑す） 又た皆な經に見る（『春秋宗朱辨義』卷七・宣公・十二葉・「〔宣公〕六年春晉趙盾衛孫免侵陳」条）。

①『公羊傳』宣公六年・傳に「趙盾弑君、此其復見何。何休注：据宋督・鄭歸生・齊崔杼、弑其君、後不復見。親弑君者、趙穿也。何休注：復見趙盾者、欲起親弑者、趙穿非盾。親弑君者趙穿、則曷爲加之趙盾。不討賊也。何休注：据皆去葬、不加弑」。

②『春秋後傳』卷七・「〔宣公〕六年春晉趙盾衛孫免侵陳」条に「趙盾之罪、嘗著於『春秋』、其再見曷爲無貶、自宋萬而下、無討賊者、則九人而已矣」。

とある。

惜しいかな、境を越えれば、乃ち免れんを」。

②文公十四年の經に「齊の公子の商人（齊・懿公） 其の君の舎（齊・昭公）を弑す。〔そして齊・懿公として即位する〕」。

③文公元年の經に「楚の世子の商臣（楚・穆王） 其の君の顓（楚・成王ノ顓）は『公羊傳』・『穀梁傳』「髡」に作る）を弑す。〔そして楚・穆王として即位する〕」。

十五 『春秋』は「弑君」のことを記し、亂臣や賊子に筆誅を加える。ただし、筆誅を行なったのは、君が無道で亂賊が勝手に行動したためであるとはしない。また、実際には「弑」されたのに、經文では「卒」と書いてあるのは、はっきりと書くには忍びなかったためであると『左傳』は考える。しかし、これは君が弑されたという變に遭遇したことを正常な「卒」と記すことで、後の人に疑いを抱かせるためである。

大夫を殺して國を稱する・國人を稱するは、文定（胡安國）の説きて甚だ其の義を得①。君を弑して名を稱する・國を稱する・國人を稱するは、『左氏傳』 國を稱し、國人を稱する者を以て其の君 無道にして自ら取るを責むとす②。文定（胡安國）の所謂ゆる「聖人 無私にして天と一と爲る」③者は、即ち『左氏傳』の無道にして自ら取るの義なり。而して經文に於いて「卒」と書するも、『左氏傳』 以て「弑」と爲す者は、則ち又た撰して聖人 書するに忍びざるの説を爲す。夫れ『春秋』 君を弑するを書し以て亂臣・賊子を誅す。必ず其の君 無道にして亂賊を縱にするを以てせず。亦た書するに忍びざると爲す所無き者は、變に遭うを以て正卒（正常な卒）と爲せば、後人をして其れを疑うを致さしむるの故なり。詳しくは各々の弑君條の下に見ゆ（『春秋宗朱辨義』 卷首・總論・九葉）

①『春秋胡傳』 卷十八・宣公十四年「春、衛殺其大夫孔達」条に「大夫を殺して名・氏を書すは、義 專殺（許可を受けず勝手に殺害する）に繋（つな）がらざればなり……國を稱して以て殺し、其の官を去らざるは、

罪 上に累ぬればなり」。また、『春秋胡傳』卷十四・文公七年「宋人殺其大夫」条に「宋人と書す者は、國 亂れて政無く、君命に非ずして衆人 之を擅殺すればなり」。

②『左傳』宣公四年・傳に「凡そ君を弑するに、君「の名」を稱するは、君 無道なればなり。臣「の名」を稱するは、臣 罪あればなり」。

③『春秋胡傳』卷二十・成公十八年「庚申、晉弑其君州蒲」条に「君を弑するは、天下の大罪なり。賊を討つは、天下の大刑なり。『春秋』は人心に合して罪を定め、聖人は天理に順いて刑を用う……仲尼は無私にして、天と一と爲る。奚ぞ獨り趙盾・許止・歸生・楚比・陳乞に於いて則ち之を責めて甚だ備わり、之を討ちて甚だ嚴なりて、而して欒武士に於いて闕畧なること此の如きや。學者 深く其の旨を求め、聖人の亂臣を誅し賊子を討つの大要を知り、而して後に與に『春秋』を言う可きなり」。

十六 諸儒は、婚姻の記述が禮に合っているかどうかを通じて孔子の意図を探ろうと議論する。道理からするとそうしたことがあるであろう。しかし、国の間の婚姻についての記述には、特別な意味がこめられているわけではない。婚姻の禮に合ったり合わなかったことに対して諸儒が議論しているのは、個々の事例についてのものである。

『春秋』の歸女（女を歸がす）・逆婦（婦を逆う）を書するに、諸儒 皆な禮に合うと禮に合わざるとに従いて論を立つ。夫れ禮の合うと合わざるとは、義 固より之れ有り、而して『春秋』 實に婚姻を著すを以て邦交①の大と爲すなり。乃ち其の歸女は則ち紀（隱公二年「冬十月、伯姬歸于紀」）・杞（莊公二十五年「伯姬歸于杞」）・鄆（僖公十五年・季姬歸于鄆）・郟（宣公十六年、秋、郟伯姬來歸）の諸小國、莒の慶（莊公二十七年「莒慶來逆叔姬」）・齊の高固（宣公五年「秋九月、齊高固來逆叔姬」）は則ち又た大夫に下し嫁するを以てし、子叔姬（魯の公女。齊・昭公夫人）の歸齊（齊に歸ぐ）は

書せず。特に伯姫の歸宋（宋に歸ぐ）に於いてのみ詳し②。逆婦は則ち桓
 [公]（桓公三年）・莊[公]（莊公十四年）・僖[公]・文[公]（文公四年）・
 宣[公]（宣公元年）・成[公]（成公十四年） 皆な齊の女を娶る、而して
 「僖公の夫人の」聲姜の逆至は書せず。襄[公]・昭[公]・定[公]・哀[公]
 の夫人は其の何氏に娶るかを詳らかにせず。聖人 蓋し意を其の間に寓す
 ること有らんか。而して禮の合うと合わざるとは、則ち事に因りて以て併
 著する者なり。詳しくは各々の逆婦・歸女條の下に見ゆ（『春秋宗朱辨義』 卷首・總論・
 九葉～十葉）

- ①『周禮』 秋官・大行人「凡そ諸侯の邦交は、歳ごとに相い問うなり、
 殷（なかごろ）に相い聘するなり、世（即位）ごとに相い朝するなり」。
- ②『春秋宗朱辨義』 卷八・成公・「[成公九年] 二月伯姫^{マヤ}歸（歸）于宋」
 條に、「宋逆伯姫」と書せざるは、劉氏（劉敞）以爲らく君 自ら
 逆^{ひか}うるは則ち常事にして書せず。然らば則ち納幣して女を致すは常事
 に非ず。『春秋』 書して以て譏を示す（『劉氏春秋傳』 卷九・成公「[成
 公九年] 二月伯姫歸于宋」條），と。『春秋』をして伯姫を賢とし、其
 の事を詳らかにし以て之を録せしむとするは（襄公三十年『公羊傳』・
 『穀梁傳』），顧だ其の禮に合う者を書せず以て之を表し、其の禮に合
 わざる者を書し以て之を累^{かさ}ぬるに反す（『春秋宗朱辨義』 卷八・成公・
 二十四葉・「[成公九年] 二月伯姫^{マヤ}歸（歸）于宋」條）。

（つづく）